

翻 訳

中国社会学の回顧と展望

韓 明 謨 著
星 明 訳

〔訳者まえがき〕

この翻訳は韓明謨の『20世紀百年学案・社会学卷』（2002、陝西人民教育出版社）の第14章「回顧与展望」を全訳したものである。本書は、全14章から構成されており、その各章は次のとおりである。第1章序論、第2章中国社会学の啓蒙時期（1891-1910）、第3章中国社会学の萌芽段階（1911-1927）、第4章革命根拠地、解放区の社会調査研究－中国社会学の成長（1928-1948）の一－、第5章中国社会性質問題、中国社会史、中国農村社会性質論戦－中国社会学の成長の二－、第6章大学と科学研究系列の社会学の発展－中国社会学の成長の三－、第7章鄉村建設運動－中国社会学の成長の四－、第8章中国社会学の停滯と回復（1949-1978）、第9章中国社会学の再建、第10章中国社会学の20年来の主要な学術成果（上）、第11章中国社会学の20年来の主要な学術成果（下）、第12章中国のソーシャルワークとソーシャルワーク教育の回復と発展、第13章鄧小平理論と新中国社会学、第14章回顧と展望、付録1胡喬木同志の社会学座談会での演説（1979年3月16日）、付録2中国社会学年表、付録3参考文献であり、総字数25万7,000字、総ページは328ページである。

この『20世紀百年学案・社会学卷』は、韓明謨自身が1987年12月に刊行した『中国社会学史』（天津人民教育出版社）を大幅に加筆したものである。『中国社会学史』は中国で社会学が回復した1979年3月の8年後の出版であり、その内容は韓明謨が中国に社会学が誕生したとする1981年から新中国成立以前の1948年までが主としてあつかわれており、1949年以後の社会学の停滯、廃止そして禁止の状況および1979年の社会学の回復後の状況については多くは触れられていない（全12章のなかで、第11章中国社会学の改革（1949～）と第12章歴史的総括の二つの章で述べられているに過ぎない）。それゆえ、本書『20世紀百年学案・社会学卷』では14章のうち、「第1章序論」から「第7章鄉村建設運動－中国社会学の成長の四」まで

は前著『中国社会学史』の内容が再録されているが、第8章から第14章までが新たに加筆されている。

韓明謨は新中国「……建国前と建国後の体制の異なる二つの場面を経験した者として⁽¹⁾、歴史的に、このことを専門的に記録する責任があるはずであり、このことが自分の中国社会学史研究の初志である」⁽²⁾と語っている。

本書は、中国で社会学が回復した1979年3月から21年経った2000年に、『中国社会学史』を新たに改訂し、社会学の回復と再建の歴史および20年来の成果について比較的多くを述べ、鄧小平理論と新たな中国社会学の発展の関係について総合的に論証したと、そして一人の社会学者として鄧小平理論の学習でえた収穫のうで書いたものであると韓明謨はいう⁽³⁾。韓明謨は中国共産党員として、史的唯物論は社会学に取って代わることはできないが、マルクス主義は社会学研究の唯一の科学的世界観と方法論であり社会学者たちに科学的認識と社会を研究する鍵を提供するという。また、中国共産党規約のなかでもっとも重要とされる「行動の指針」にあげられている個人名を冠した指導者のうちの一人である「鄧小平理論」をあげないわけにはいかなかったことが容易に理解できる⁽⁴⁾。

一．社会学の歴史的責任

中国社会学はまもなくその最初の100年の歳月を歩み終え、ほどなく次の100年の未来に歩みだそうとしている⁽⁵⁾。過去100年の不遇な道程を顧みると、たびたびのすさまじい猛烈な攻撃を経て、ついに20年前に蘇った。20年来の中国社会学の再建と発展は、本書のこれまでの章のいくつかの紹介から、その成果は少なくないということを知ることができる。多くの外国の研究者仲間は、いずれも中国の社会学の発展は緩慢ではないと思っている。しかし、これらの成果は、もし20年の歩みを回顧するなら、明らかに平坦というわけではなかった。社会学の回復を望まないある一部の人たちは、依然としてたびたび社会学に対して圧力を加えた。たとえば社会学をなにか「敏感な科学」のたぐいと指摘して述べ、社会学をまだ乳飲み児のうちに圧殺するつもりである。このように100年来の社会学の成果は、確かに奔命に疲れ、艱難辛苦の止まない、いわゆる「櫛風沐雨」（雨の日も風の日も奔走し苦労すること）のなかを歩んで獲得してきたものと考えざるをえない。

20年来の社会主義中国の発展と進歩を公正に評価すれば、多数の社会学者の心血と知恵が凝集されており、そのなかでも社会学者の少なくない貢献もあった。この20年は広範な社会学者のもっとも創造に富み、もっとも功績があった時期であり、社会学の過去100年でもっとも生命力があり、もっとも繁栄した時期である。社会学の過去20年は開拓の20年であ



北京市政治協商會議センターのロビーにて：2004 年 8 月 29 日
(向かって右側が韓明謨先生、左側が星)

り、勝利の 20 年である。社会学者はまさに自信満々に、鄧小平理論の偉大な旗幟を高々とあげ、勇敢に 21 世紀に邁進している。社会学者は、これから 21 世紀中葉までの 50 年は、社会主義現代化の壮大な青写真を実現する 50 年であり、中華民族の偉大な復興を実現する 50 年だとはっきりと実感した⁽⁶⁾。これはわれわれ一人ひとりの中国人についていえば、希望に満ちたすばらしい前途であるばかりでなく、苦労と努力を費やさなければならぬ奮闘の道りでもある。社会学の発展に対して、社会学者の研究についていえば、厳しい挑戦であるばかりでなく、千載一隅の黄金時期でもある。これはまさに現代の中国の社会学者が苦しい鍛錬のなかで、手腕を試す絶好のチャンスであり、また中国の社会学の歴史的な責任でもある。

二. 中国社会学の 100 年来の発展の特徴

100 年の紆余曲折した道りを歩んできた中国の社会学は、長い歳月のなかで、その活動には、どのような注目できる特徴があったのか。前述の各章で示した概要および第 11 章 7 節の「20 年来の社会学の発展の結論」に基づいて、総合的にみれば少なくとも以下の三つの比較的明確な特徴にまとめることができる。すなわち、(一) 終始貫徹した実践的応用性、(二) 思想理論の多元的包容性、(三) 学問発展の独立自主性である。次に、それぞれについて説明する。

(一) 終始貫徹した実践的応用性

中国の社会学はその誕生の時から、現在に至るまで 100 年余り、終始豊かな実践的応用の精神を貫徹してきた。嚴復は H. スпенサーの *The Study of Sociology* を訳した『群学肄言』(1903) の序のなかで、「群学とはなにか。科学の法則で、群衆の変化を観察して、もって過去のことを明らかにし、やってくる未来を予測する」と語っている。孫本文もその著『社会学原理』の序のなかで、「なんのために社会学を行ない、なにをするのか。曰く、人類の共同生活の原理原則を研究して、改良、進歩の理由を求めるものなり」と語っている。中国社会学の初期の発展情況からみれば、当時の社会学は「学以致用」(学んで実際に役立てること)を重

んじており、康有為や梁啓超らは「経世の学」と呼んだ。康、梁、嚴らは中国の社会学の發展史上の先駆者であり、創立者であり、かれらの著述のなかから、中国の社会学ははじまるや否やすぐに社会学の応用精神が充満していたことが理解できる。かれらは社会学を「群学」と呼び、「経世致用」（世を治めるために役立てること）の学のなかに入るものとし、「群学」は「群術」であるとみなした。これはすべて中国の社会学はその乳飲み児の時期から非常に抽象的な理論でも、非常に原則的な理論でもなく、中国の各階層の人たちが喜び、必要とするものであり、嚴復がいうところの「有修斉治平之功」（まず自身を修め、家庭を平穩にし、国を治め、しかる後に天下を太平にする功がある）の働きをすることができ、国を治め、天下を太平にすることができる効果があり、応用性に富む社会学であることを証明している。これもまた中国の社会学のすぐれた伝統のはじまりと究極の目的ということができる。

次に、まえにすでに述べたように、中国の社会学は辛亥革命で発芽を早め、さらに時代を画する五・四運動から生長に適した風と雨を受けて、潤って育てあげられ、20年代の後期および30年代の初期に至り、すでに鮮やかな緑色の新芽がでてきて、またいくつかの頑丈な枝と幹が生長した。第一の枝と幹は、中国共産党員が1927年の「四・一二」反革命の政変に遭遇した後、農村に入り、革命根拠地を樹立したことである。前段階の革命の失敗の教訓をくみ取った基礎のうえに、革命の性質と道路の問題を徹底的に解決するために、農村社会と小都市・田舎町に対してマルクス主義の調査研究を真剣に繰り返した。これらは、われわれが「解放区の社会調査」と呼ぶものである。また、革命根拠地以外の広大な中国で、中国革命の全体の形勢の逆転に対する反応として、1931年の「九・一八」事変、日本帝国主義がわが東北三省への侵略、占拠に対する反応として、知識界で中国社会の歴史的性質に関する三回の大きな論争が巻き起こった。第二の枝と幹は大学および文化出版界の社会学の發展である。第三の枝と幹は中国の農村社会の動揺、農村経済の破産に対する反応として、その後に巻き起こった改良主義的な「郷村建設運動」である。この三つの枝と幹は当時の国内、国際の複雑に錯綜した関係のなかで、さまざまな先鋭化した階級矛盾のなかで同時に進み、社会学は一時期きわめて盛んになった。それらの共通した特徴は、たとえ研究方法上、思想理論上、いかに見解がまちまちであっても、正しくても誤っていたとしても、しかし共通の目標がある。それらはどれも空論を重んずることなく、中国を災難から救いだそうと努力することであり、社会学の応用精神が満ちあふれている。したがって、この段階の社会学は「中国を救う学」と呼ぶことができる。

社会学が回復して以来、その豊かな応用価値をいっそう發揮できる段階に進みはじめ、社会学は「社会主義建設の学」の段階に入ったといっても差し支えない。多くの事実を、前述の第10章（中国社会学の20年来の主要な学術成果・上）、第11章（中国社会学の20年来の主要な学術成果・下）ですでにかいつまんで紹介したけれども、言及したことは非常に不完全なものである。

社会学の直接的・間接的な応用の対象は多方面にわたっている。周知のように、ずっと以前

に制定された『中華人民共和国の国民および社会発展第六期五か年計画 (1981-1985)』のなかの第 4 編第 26 章の「哲学と社会科学」のなかで哲学と社会科学の研究の重点を 12 の分野に分け、そして社会学の研究はマルクス主義基本理論と哲学研究、経済学と現実の経済問題研究、政治学と法学の研究に次いで 4 番目の重点に入れられた。このことから社会主義の中国が社会学に対していかに切実な期待をもっているかがわかる。かつ社会学者の長年来の仕事は人民の希望を裏切っていない。はじめはただ断片的ないくつかの調査研究を行っていたが、1983 年から次第に計画性のある調査研究に進展した。

社会学に携わる者も政府の関連部門に協力し、多くの仕事を行なった。たとえば、公安、労働、社会保障などの部門はすべて社会学者と提携し、社会学の領域から面前の社会問題を調査研究し、解決した。たとえば、さきに触れた天津市政府は仕事の必要とにらみ合わせて、毎年必ず天津社会科学院社会学研究所と南開大学社会学部の教師と学生の参加のもとで 1,000 戸調査を行ない、市政改革の参考とした。これは社会学と行政管理が結び付いたものである。北京大学の教師と学生は国家が社会保険制度をつくる研究、国家物価改革の心理予測、北京市企業指導幹部の選抜基準の研究および 2000 年中国発展予測などの非常に応用性の強い課題に参加した。これは社会学に携わる者に対して非常に大きな鼓舞であり、われわれに力がますますもって足りないことを感じさせる。

社会学はもともと応用性が非常に強い学問である。長年来、各国はいずれも社会学の実際面の応用研究を奨励している。中国社会学の研究の重点は目下の社会主義中国を認識することに置かなければならない、最初に目前の改革と発展である。改革開放の現実直面し、改革開放のために奉仕し、中国社会の全面発展のために奉仕してこそはじめて、社会学の繁栄局面を切り開くことができる。

中国社会学は実践的な応用性をもっており、その根本的な原因をわれわれは次のように考えている。

1. 中国の伝統的哲学の観点、その重点は人生哲学であり、处世哲学であり、社会倫理学でもあり、しかし西洋哲学のように、いわゆる存在論、認識論を追求することではない。これは中国の伝統的な学術思想の主流は空論を重んじず、追求するのは現実の生活であって、理想の生活ではないということに影響を及ぼした。まさに孔子のいう「不知生、焉知生」(未だ生を知らず、いづくんぞ死を知らんや)である。中国社会学は応用精神、応用の特徴が充満しているが、その思想の根源はまさにここにある。
2. 中国の社会学は 100 年余り前の内憂外患のなかで誕生し、多くの列強が中国を分割して占領しようとする悲痛な境遇のなかで生まれた。多くの中国の社会学者はこの現実の社会生活の不遇のなかで、だれもが愛国、報国の志しが胸にあふれ、中国を塗炭の苦しみから救いだそうとした。
3. 中国の社会学はそれ自体の発展のなかで、時機にかなってマルクス主義思想の啓発を受け

た。マルクス主義はわれわれに「哲学者たちは世界をたださまざまに解釈してきただけである。肝腎なのはそれを変えることである」と教えた。応用を重視することは、中国社会学の発展に強靱な生命を与えた。

（二）思想理論の多元的包容性

社会学は多元的パラダイム科学（a Multiple-Paradigm Science）であり、相互に競い合う科学である。いまなお、社会学は一つの固定した理論も、また唯一無二の科学的パラダイムもない。社会学理論という大ファミリーは壮大な様相を呈しており、異彩を放っているといえる。

社会学にはいったいどれだけのパラダイムがあるのか、一人ひとり見方はそれぞれ違う。目下比較的多くの社会学者に認められているのは、アメリカのワシントン大学の社会学多元理論を研究している社会学者ジョージ・リッツア（George Ritzer）が提起した三分法であると考えても差し支えない。リッツアは現在の社会学の主要なパラダイムには三つあると考えている、すなわち社会的事実パラダイム（the socialfacts paradigm）、社会的解釈パラダイム（the socialdefinition paradigm）および社会的行動パラダイム（the socialbehavior paradigm）である⁽⁷⁾。社会的事実パラダイムは、またそれを実証主義あるいは自然主義パラダイムとも呼ぶひともあるけれども、その内容はまったく同じとはいえない。社会的解釈パラダイムは理解社会学パラダイムあるいは人文主義パラダイムと呼ぶひともあるけれども、その内容はまったく同じとはいえない。社会的行動パラダイムは主に社会心理学、とくにアメリカの心理学者 B. F. スキナーの社会行動主義心理学を指す⁽⁸⁾。リッツアもまた整理統合する道を探求している。

社会学の思想理論上の多元的パラダイムは、中国社会学の発展の過程のなかでもとくに顕著にあらわれた。中国の社会学者の思想上の次々とあらわれる表現は、往々にして学ぶひとを一致した結論に至ることを困難にさせ、去就に迷わす。前にすでにいったように、孫本文は『当代中国社会学』のなかで、自らの社会学は文化学派の社会学でも、心理学派の社会学でもないといい、自らは綜合学派であり、また系統社会学ともいったけれども⁽⁹⁾、孫本文は自らの綜合的観点の意味、系統的観点の真の意味を決して明確に説明していない。

中国社会学の理論的多元性は、一方で社会学それ自体がまだ完全に成熟していないこと、また他方で社会学が社会の発展法則を模索していることをは、社会生活のなかの人間の生理、心理、思惟活動が高度に総合かつ高度に複雑な結合のあらわれであり、難しさ、難点が比較的多く、比較的大きく、一時に非常に精確な法則をみつけたことは容易ではないことの反映である。生物学が自然生命の最高の統括の法則を探究することと同じように、難点、難しさが比較的多く、大きい。しかし別の面で、方法論の角度からいえば、また社会学理論の多元的包容性は、必ずしも悪いことではなくて、むしろ必然なことも体现している。社会現象それ自体が複

雑で変化に富むものなので、さまざまな角度から、現実的に、歴史的に探究、分析を進めなければならない、これは現在の科学研究の基本的な精神でもある。いわゆる包容性 (compatibility) とは異なったことがらが調和共存できることであり、小は電子部品から、大は科学技術にまで至る。科学技術の融合は、異なった学問の相互フォローと協力であり、その包容性である。費孝通は早くも 40 年代に社会学の多元的包容性に対して比較的透徹した解釈を行なった。費は「コントはずっと前にすでに宇宙の現象のヒエラルヒーを指摘し、上級にあるものはすべて必然的に下級のものを基礎とする、ゆえに下級のものによって上級のものを『解釈』することができる。社会現象はまさに最高峰にある、したがってそのほかのいかなる現象からでも社会現象を解釈することができる。解釈からさらに進んで『決定論』となる、社会現象がその他の現象を決定するということである。このようにして非常に多くのその他の科学の訓練を受けた学者を社会学に引き付け、社会現象を討論するようになった。したがって、社会学のなかに多くの学派ができた。すなわち、機械学派、生物学派、地理学派、文化学派である。ソローキンはかつて『当代社会学学説』⁽¹⁰⁾を書き、これらの多くの学派を紹介した」と述べている。また、費は「社会学はもしかしたら総合の道を歩むだけかもしれないが、しかしどのような総合なのか。ソローキンはそれぞれの学派の偏った見解を批判した後に、 $X+1$ の公式を提起した、ソローキンの観点は、各学派は自らの学派の周辺部を偏重するだけであって、全周があるはずである。実は、かれの公式は「総合」というより、むしろ「総和」といったほうがいい。つまり、総はそれぞれの周辺部を足したものからなり、和は偏った見解を仲裁する。しかし、足したものはなにか新たな貢献があるのか。仲裁人のような立場は、一つの学問の基礎になるには不十分である。社会学の特色はあらゆる面で周到であることがよいのか」とも述べている。

そのうえで費孝通は二つの路線から総合的な研究を行なうことを提起した。一つ目はコミュニティ研究であり、社会学の研究を具体的、時空的な概念の社会に具体化した。まず、コミュニティの構造の記述を行ない、次に異なったコミュニティの構造について比較研究を行なう。二つ目の総合的な研究は、社会現象の共通のありさまを、社会制度、社会的行為の過程と形式などに基づいて研究することであり、これは通常「純粋社会学」と呼ばれものである。

(三) 学科発展の独立自主性

社会学の多くの思想理論は長年来すべて外国から導入されたものであるが、しかし中国に伝わって以後、直ちに中国の学者によって慎重に社会学の「中国化」が行なわれ、社会学を中国のものにできるだけやく変えようとした。これは中国の社会学の 100 年来の発展の独立自主性の特徴をあらわしている。

本書のいくつかの章節のなかで、中国の社会学の啓蒙段階で、康有為、梁啓超、嚴復らは中国の古代の荀子の思想と結びつけて、社会学を群学と呼んだことを示し、中国の社会学が中国

であられるとすぐその独立自主性を体現したことを説明した。30, 40 年代に至り、当時の中国の社会学の多くの幹や枝はどれかを問わず、みな中国の實際を積極的に強調し、その活動面で中国の實際と結びつけて、中国の實際を了解し、中国社会の實際の問題を解決し、独立自主の中国の社会学を打ちたてるために多くの活動を行なった。大学の社会学を例にすると、呉文藻、陳達を代表として「社会学の中国化」の呼びかけを提起したし、また燕京大学では中国の特色をもつ社会学の「中国学派」を創造した。この学派の研究の考えに照らして、1979 年の社会学の回復、再建以来、また都市・農村社会学の新たな領域－小城鎮研究が切り開かれて、社会主義中国の社会発展のために大きな貢献をなした。これらのあらゆることは中国の社会学の発展の独立自主の性格が 100 年を歩んできたなかで一貫したものである。この性格は中国の社会学者が理論思想上、盲従せず、従属せず、自分の頭で考え、わき目もふらずに新たな活路を求める性格を具体的にあらわしている。

さらに深くみれば、この性格の背後には、もしかしたら中国の知識人の深思熟慮し、真理を熱愛し、正義、公明正大に向かい、権力者に取り入らないという貴ぶべき学術精神を体現しているのかも知れない。この精神は、さらに進んでかれらの民主の追求、祖国の防衛、人民を困難な境遇から救いだす政治的熱意と責任感に昇華した。1949 年、蒋介石の国民党は敗北し、台湾に逃れたが、中国の有名な社会学者はほとんどだれひとり蒋介石国民党とともに、台湾に行かなかった⁽¹¹⁾。これは科学、民主を熱愛し、国を愛し、人民を愛する独立自主の性格を充分証明している。確かにある若い台湾の社会学者が最近「早期のわが国の社会学研究の成果は、世界の学術の殿堂のなかで、ないがしろにできない地位を占めていた、しかし 1949 年に政府が台湾に政権を移した後、社会学界の精鋭はつき従わなかったので、社会学の伝承の中断と研究教育の水準の低下をきたした」⁽¹²⁾とっているとおりである。文中でいうところの「政府の政権移動」は明らかに「自負心をもった」ことばであり、反駁するに値しないが、かれのいう「社会学界の精鋭は台湾につき従わなかった」ということは確かに 100 パーセント事実である。

中国社会学の 100 年の歴史の発展のなかの独立自主の性格は、また別の相反する理論が絶えず 批判されることから証明される。この理論はいわゆる「全面的西洋化」論である。「全面的西洋化」の主張がもっとも早くみられるのは 1929 年、上海で出版された英文の『中国キリスト教年鑑』に掲載された胡適の専門的な論文「中国の今日の文化衝突」である。論文のなかで「この問題の解決には三つの可能性がある。一つは中国はこの新たな文化の承諾を拒絶することができる、またその進入を拒むことができる、二つは中国はこの新たな文化を全面的に受け入れることができる、三つは中国はこの文化のなかの必要とする要素を採用し、この文化のなかで中国が本質的でないかまたは適さないと考える要素を排除することができる。第一の態度は抵抗、第二の態度は全面的受容、第三の態度は選択的受容である」と述べている。また「わたし自身は一貫して選択的受容を呼びかける一人であるが、しかしわたしは今になってわ

かってきた、この小心翼翼とした選択は不可能であること、またする必要もないと指摘したい」とも述べている。この文章がでてから、多くの論争が巻き起こった。前の章で社会学者潘光旦が 1930 年 2 月 27 日の英文の『中国評論週報』(*The China Critic*) の書評のなかですでに、胡適が用いている **Wholesale Westernization** と **Wholehearted Modernization** の二つの語の意味は完全に同じというわけではなく、前者は「全面的西洋化」と訳され、後者は「全力的近代化」または「十分な近代化」と訳すことができると指摘した。潘光旦は「全力的近代化」に賛成し、「全面的西洋化」には不賛成であることを示した。ここから、中国のことばのなかに「全面的西洋化」という語があらわれた。

胡適の後に続いて、年長の社会学者のなかで、「全面的西洋化」を真っ先に主張したのは陳序経である。陳序経は 1932 年に『中国文化的出路』(1934 年 1 月出版) を著し、「序論」のなかで、この本を執筆した趣旨を次のように説明している。すなわち「いわゆる東西文化を研究して、そのなかに一つの方法をみつけて、それによって中国文化の前途を考える人たちは、およそ次の三つの学派のなかに入る。1. 全面的に西洋文化を受容するという主張、2. 中国固有の文化に再度戻すという主張、3. 折衷的方法をとる主張である。本書の趣旨はこの三つの学派の意見を比較研究し、そして私たちの歩むべき道を探しだすこと、あるいはとるべき方法を探しだすことである」と。かれは一つの比較研究を行なったのちに、結論をだして「折衷的方法はできない、復古の道筋もつうじない。それらの最大の欠点は、前者は文化の一致および調和の真の意味について無知であり、また後者は文化の発展、変化の道理について無知である。前者の考えは、文化の全部をまるで古い家屋のように、われわれはそれを壊すことができ、どの石材あるいは木材が流用できるかとみる。それらは、文化のそれぞれの側面の分析はわれわれの自身の仮定でしかないことを忘れていて、文化それ自体はこんなことはない。後者は時代と環境は変化しないと思っており、したがって聖人の立法がいつの時代でも、全世界で使えると思っている。かれらは聖人が聖人であるゆえんは、すべてこの時代と環境が生みだしたものにすぎないことを忘れていて。したがって、われわれの唯一の方法は、西洋化を全面的に受容することである」といった。これ以後、陳序経はまた多くの文章を次々と発表し、かれの「全面的西洋化」論の弁護を繰り返した。

陳序経の全面的西洋化論は、すぐに別の著名な社会学者呉景超の反対を受けた。呉景超は、中国文化を全面的に否定することはできないと考えた。「われわれは中国固有の文化のなかで、いずれかの部分はまだ環境に適応する力をもっているのです、保存すべきだと指摘したい」⁽¹³⁾と考えた。これは全面的西洋化論が中国の社会学の内部でも共感を受けるに至らなかったことを物語っている。中国の社会学は中国の実際と結びつき独立自主的に前に向かって発展するように要求されることは、潘光旦の 1942 年の論文「中国の社会学を語る」からみれば、より普遍的な要求であった。潘はいう「われわれが長年来注意を払ってきたのはただ一般的な社会だけであり、甚だしきに至っては西洋の社会を一般的な社会としてみて、中国の社会をおろそかに

した」と。かれは中国の社会学には、過去に研究をなおざりにしてきたいくつかの主要な弊害があるという、つまり一つは人事問題の研究であり、二つは社会を研究するひとのほとんどが歴史に精通していないことであり、三つは研究方法の多くは外来のものであることである。かれは「したがって、中国の社会学のこの三つの弊害には一つの主要原因がある、しかしこの原因も西洋の社会学から踏襲してきたものでないとはいえない。この弊害は『同じところだけみて、異なったところはみない』ということである。第一の弊害はひとひとの間の異なったところがみえていないことによるものであり、第二の弊害は社会間の異なったところ、あるいはグループ間の異なったところがみえていないことによるものであり、第三の弊害は歴史的な社会間の異なったところがみえていないことによるものである、このような空疎で、現実離れしている弊害を取り除いて、そして中国の社会生活に利用できる社会学を確立するには、当面の急務はわれわれの同異を識別する眼力を強くしなければならないことである」⁽¹⁴⁾という。

三. 将来を展望する

（一）社会学は必ず大きな発展がなければならない

われわれの国家はまさに偉大な変革の時期にあり、億万の人民が党の指導のもとで、まさしく中国の特色のある社会主義の建設に努力している、わが国を高度文明、高度民主の社会主義の近代化国家につくりあげるために奮闘している。わが国を近代化された社会主義の強国につくりあげるために、社会科学も自然科学と同じように必ず大きな発展がなければならない、そのなかで社会学も大きな発展を必要とする。改革と対外開放は、経済、政治、社会生活およびイデオロギーなどの各方面にきわめて深刻な変化を引き起こし、研究して解決しなければならない新たな情況、新たな社会問題が次々とあらわれて尽きず、過去にすでに定説であったいくつかの問題も研究しなおす必要があると思う、これは社会学に対する挑戦である。わたしたちは深く系統的に調査研究を行ない、適時に経験を総括し、科学的な解釈、観察、および予測を行ない、実践のためにさまざまな建議あるいは方案を提供し、理論的な先行作用とフィードバック作用をできるだけ充分発揮するようにはかり、そしてわれわれの実践活動の自覚性と予見性を高めなくてはならない。われわれは過去 20 年の研究活動の「みんなで力を合わせて難関に取り組む」という長所を継続して発揮しなければならないし、また横断的な協力関係を強め、目下の相互分断状態と封鎖の状態を変えなければならない。しかし、社会学の内部の各方面の研究力量の間の関係を強めるだけでなく、とりわけ異なった学問の間の研究力量の関係、研究機構と実際部門との関係を強めなければならない。社会学研究の隊伍の建設を十分に重視し、人材の発掘、人材の養成に気を配らなければならない、一部の優秀な青年の優等生に対して、有効な措置をとり、養成の速度を速めなければならない。

(二) 社会実践の土壌のなかから生まれてきた新理論

数年前、『学習と探索』という雑誌に、袁陽の署名のある「中国社会学の危機」⁽¹⁵⁾と題する論文があった。作者は長年来の中国社会学の建設に対する反省から、「中国社会学を支える明確なロジックの支点がみえない」⁽¹⁶⁾と考えている。かれが列挙していることは、「哲学と社会学を混同するか、さもなくば二者を切り離すか、哲学を社会学の建設の末端としているか、このことによって中国社会学が西洋の社会学を導入する時の主体性のなさが生まれた。このほかに、また問題が種々ある。マルクス主義社会学を建設した時の按図索驥（こだわって融通がきかないこと）、学問の自覚性と活動の自覚性のアンバランス、研究方法上の偏った定量化傾向、分科社会学の分離傾向」⁽¹⁷⁾である。したがって、かれは「中国社会学界の当面の急務は哲学意識を高め、科学のビルを構築する支点として科学的な哲学理論の探究に尽力し、学科の理論建設と研究員に対する理論的素養の養成を強化しなければならない。このようにしてこそはじめて、中国の社会学はより生き生きとした姿で、社会科学の森林のなかに元気に生長することができる」⁽¹⁸⁾という。われわれはこの作者がいうことに同意する点も不同意の点もある。かれの状況についての分析、すなわちかれがいうところの「問題が種々ある」ことには同意する。しかし、社会学が危機を抜けだすためのかれの建議についてはいいかげんに同意することができない。かれが提出した「哲学意識を高め、学問のビルを構築する支点として科学的な哲学理論の探究に尽力する」という主張は余計なことである。というのも、社会学の回復以来いままおマルクス主義、毛沢東思想および鄧小平理論を指導としているからである。これこそ社会学の「科学的哲学理論を学問のビルを構築する支点としている」ことであり、ほかに学問のビルを構築する支点としての科学的哲学理論を探究する必要があるのか。当然、一部の社会学者たちはマルクス主義をまだ十分に身につけていないかもしれない。個々には依然として作者がいうところの「按図索驥」の現象がある。しかし、この教条主義的現象は、社会学の陣営のなかでももしかしたら「主流」とはいえないかもしれない。というのも、社会学の主流思想は、社会学の理論を構築し、発展させるのは、社会の調査研究によってであり、社会的実践によってであって、閉じこもって「哲学意識を高める」ということではないと主張しているからである。

北京大学の学内雑誌に、ある数学部の学生が「理論的層次と理論的發展」という文章を書いた。文章は別の著者が提出した理論的層次問題に対して異なった意味をもっていた、その著者は層次の角度から、「哲学の基本的な特徴は抽象性である、……人類の認識の發展にともなって、それぞれの領域の知識は相次いで『ことばの還元』をとおして、哲学のなかから独立してあらわれ、比較的低層次の専門理論となった」と考えた。しかし、その数学部の学生はそれが正しいとは思わず、「多くの哲学と科学の發展史を証明するには、著者の論点は成立しえない、ニュートンが万有引力を発見したのは、決して哲学の原理のなかから還元してきたものではない。これに反して、逆にカントはニュートンのいくつかの大きな定理のための哲学的根拠を探

究した。哲学は知識体系の母体ではない、もし哲学が高層次の理論として、低層次の理論への作用を意図すれば、哲学は一つの工具に過ぎなくなる。それぞれの層次の理論は相対的に独立して発展する可能性があり、それらは相互に促進し合い、実践で遭遇した問題を共同で解決する」と考えた。わたしはこの数学部の学生の見解に同意する。いろいろな科学が哲学の懐から解放されることは、確かに、いわゆる「ことばの還元」ではない、もともとの哲学のことばを用いて思想を表現していない、現在は日常生活の通俗のことばに還元したということではなく、実践の高まりである。社会学も例外ではない。わたしは社会学の理論建設、理論体系は決して哲学のなかから「ことばの還元」を懇願できないと感じている。社会学は哲学理論をもって学問のビルを建築することができないのであって、自らの実践のなかから高め、学問のビルを建築する理論を探究するべきである。

依然として科学が非常に立ち遅れている中国にあって、教条を理論とすることに慣れている国では、科学的社会学理論の発展はやはり実践から材料を獲得し、そして抽象のとりだすことを行なうことがよい。費孝通はアメリカのニューヨーク市立大学ハンターカレッジの教授 **Burton Postermak** に招請されて訪問した時、**Postermak** が費孝通に「中国の社会学の主要な方向は当然この具体的な問題（社会主義の建設問題を指す。編者注）を解決すべきことにあり、より理論的な問題を説明することではない、これはあなたの見解ですか」と質問した。費は「イエスとも、ノーともいえる。われわれの学科は中国の具体的に差し迫った問題の解決に力を尽くさなければならない。しかし、なぜこの研究と「理論的」研究を区別するのか。われわれは同じように理論的研究を行なっている」⁽¹⁹⁾と答えた。これはそれらのいわゆる「理論好き」のひとに、ややもすればかれらが構築しようとする理論体系は、ただいくつかの「ことばの還元」に過ぎず、一種の知識の遊びに終わってしまうことを教えている。1989年3月26日付けの『香港虎報』に中国人と西洋人の思考様式にどんな違いがあるかについて検討した文章がある、そこでは中国人の慣れている思考様式は大雑把に問題をみることであり、よって中国人はよく大問題を考えることを好んで、实际的な、具体的なことにあまり注意を払わない、しかし、西洋人がいつもとるのは具体的事例から全体の解析に至る思考様式であると書かれている。この文章は、1979年から再び社会学が講義されて以来、中国は一貫してこの学問の境界線、対象を明らかにすることに努力している、いまなお社会学の範囲および社会学とその他の社会科学の関係を討論している。中国のいくつかの大学の社会学部の教師が「中国社会」を大いに議論するのをよくみるが、しかしかれらの学校がある都市の状況についてはかえってなにも知らないとも書いている。わたしはこの文章の分析に非常に同意する、実のところこの区別は中国人の思考様式が異なることからではない。したがって、わたしは社会学の研究は哲学の懐から遠く離れたほうがよいといたい。社会学のビルは煉瓦一枚一枚、苦勞してつくったものである。20年来われわれの数えきれないほどの専攻、兼業の社会学従事者がすでに少なくない建築材料をつくったので、このビルがすでにかすかに望める。

(三) 21 世紀, 中国社会学は一つの統一的理論体系, 理論構築を必要とするか

21 世紀は社会学にとって, 希望と挑戦に満ちあふれた世紀である。

中国社会学の 21 世紀の発展について, 社会学の基本概念, 基本原理および理論枠組みについての長い間の論争によって, 社会学研究の基本的特徴についての異なった理解によって, いまに至ってもいまだに統一的な理論体系が形成されていないという意見がある。こういった現状の存在は, いきおい中国社会学の学科建設に影響を及ぼす, われわれは間もなく 20 世紀に別れを告げ, 21 世紀を迎えようとしている時に, われわれに歴史的責任が求められている, それは必ず中国社会学の理論研究を高度に重視し, できるだけ早く 21 世紀の中国社会学の理論枠組みを確立し, もって本学科を科学, 規範, 健全に向かって発展させるよう指導することが求められる, という意見がある⁽²⁰⁾。この意見は, 換言すれば, 懸念ともいうことができるが, ごくまれなものではないかもしれない。しかし, わたしはこの懸念をする必要がないと思う。というのも, 一つの学問が立ちあがったどうか, 発展したかどうか, そして徐々に成熟したかどうかという根拠は, その学問が「統一的理論体系」あるいは「理論枠組み」をもつか否かではない。周知のように, アメリカの社会学は本世紀には世界のその他の各国より発展が非常に速く, 社会学の「理論体系」あるいは「理論枠組み」は多くのものが並行して進み, かつ未統一である。しかし, この状態は, かれらの社会学の学科建設に対しての影響にはならないし, かれらの学科発展の科学, 規範, 健全の方向に対して影響しない。社会学は多元的パラダイムの社会科学である。これは, 社会学者たちおよび社会学それ自体が, かれらが置かれる社会発展の具体的な状況から離れて, 自らが単独で決定できるものではないということである。これは国際社会学の発展の全般的な状況から, あるいは中国社会学の 100 年来の発展の状況からでも, いずれもそのようである。しかし, 社会学は結局発展した, それゆえこの種の懸念はまったく必要がないと思う。

統一的理論体系あるいは理論枠組みを求めるという見解は, 次の考えから生まれる可能性がある。つまり, 中国社会学がマルクス主義, 毛沢東思想, 鄧小平理論を指導とする以上, この統一的指導のもとで統一的理論体系を建てることはできるはずだという考えである。これは一種の誤解であるだけでなく, マルクス主義と具体的な社会科学という, それぞれ異なった層次に属しているものを混同している。マルクス主義は社会学研究の唯一の科学的世界観と方法論であり, 社会学者たちに科学的認識と社会を研究する鍵を提供する。しかし, マルクス主義は具体的な社会学の研究に取って代わろうとするものではなく, 複雑な社会現象の研究のなかから, 異なった角度から掘り下げた研究のなかから生みだされた異なった社会学パラダイム, 理論を規範化したり, 統一したりすることをもくろむものでもない。社会学の 100 年来の発展は, 多方面で社会人士の希望を満足させないばかりか, 社会学界の同僚たちをやきもきさせている。一つの学問の回復と成長は確かに容易ではないが, とくに目下のわが国では, 風雨の止まない状況のもとでさらに容易でない。しかし自らを慰めることができるのは, 社会には社会

学に対して依然として非常に高い期待と支持が託されていることであり、またわれわれ自身の陣営も次第に強大になり、真剣に仕事をしていることである。21世紀の中国の社会改革、社会主義の建設と発展は社会学を必要とする。われわれは引き続き、われわれの貢献をすることができると自信をもつ。われわれは、春の風と雨で、潤った土壌から数多くの社会学の新芽が成長する日を迎えている。

〔注〕

- (1) 訳者註：韓明謨は中国の社会学者の世代を次の四世代に分けている。すなわち、第一世代は1920年代に留学から帰国して社会学部を創立した人たち、孫本文、陳達、潘光旦ら、第二世代は30年代の費孝通、林耀華ら、第三世代は40年代の袁方、王康、韓明謨ら、第五世代は50年代で卒業生は多くなくもっとも知られているのは元国家計画生育委员会主任、現國務委員の彭佩雲である（同上、p.2）。第一世代から第四世代までが建国前と建国後を経験している。訳者は第三世代の袁方（1918-2000）、王康（1919-2017）、韓明謨（1918-2014）のいずれの先生方とも交流をもってきたが、三人とも鬼籍に入られた。
- (2) 訳者註：韓明謨、2002、「まえがき」、『20世紀百年学案・社会学卷』、陝西人民教育出版社、p.2。韓明謨が中国社会学史を研究したもう一つの理由は、ちょうど大学で「中国社会学史」のカリキュラムが設置されたためにそのテキストが必要とされたことである（同上、p.2）。
- (3) 訳者註：韓明謨、同上、p.4。
- (4) 訳者註：「鄧小平理論」は1997年に党規約に書き込まれた（1997年2月19日の死去後）。また、個人名を冠したもう一人は1949年の建国時に書き込まれた「毛沢東思想」である。近年では、「行動指針」に2017年10月の第19回党大会で習近平の個人名を冠した「習近平の新時代の中国の特色ある社会主義思想」（習近平新時代中国特特色社会主義思想）が書き込まれた。1921年、中国共産党が結党された年に開催された第1回党大会から2017年の19回党大会までの党史96年のなかで、党規約の行動の指針に個人名が冠せられているのは「マルクス・レーニン主義」、「毛沢東思想」、「鄧小平理論」そして「習近平の新時代の中国の特色ある社会主義思想」であり、江沢民の「三つの代表」と胡錦濤の「科学的發展観」にはいずれも個人名が冠されていない。
- (5) 訳者註：韓明謨は中国の社会学の開始を1881年としているので、本書『20世紀百年学案・社会学卷』公刊時の2002年は社会学の開始から111年を経過したことになる。
- (6) 訳者註：21世紀の50年、すなわち2050年は中華人民共和国の建国のほぼ100周年をさす。
- (7) 訳者註：ジョージ・リッツアはこの三つのパラダイムについて、the socialfacts paradigmにはエミール・デュルケムの社会学的方法の基準と自殺論を、the socialdefinition paradigmにはマックス・ヴェーバーの社会的行為の研究、the socialbehavior paradigmには心理学者のB. F. スキナーの研究をあげている（George Ritzer, 1981, *Toward an Integrated Sociological Paradigm: The Search for an Exemplar and an Image of the Subject Matter*, pp.7-9, Allyn and Bacon, Inc.）。
- (8) ジョージ・リッツア著、1940, *Sociological theory*, 馬康庄、陳信木訳、1995、台湾巨流図書公司、pp.779-761。
- (9) 孫本文、1948、『当代中国社会学』、勝利出版社、p.246。
- (10) Sorokin, Pitirim Alexandrovic, 1928, *Contemporary sociological theories*, 黄文山訳、1965、『当代社会学学説』（上・下）、台湾商務印書館。
- (11) 訳者註：韓明謨のこの記述は正確ではない。実際には龍冠海が1949年に台湾に行っている。龍は台湾大学社会学部の創設、中国社会学社の復活、『中国社会学刊』の創刊を行なった（星明、

2018, 「民国期末 (1947-1948) の中国の社会学の現状と将来についての社会学者の意見」, 『社会学部論集』, 第 68 号, p.6)。また, 台湾の中央研究院民族学研究所の章英華によれば, 「1925 年アメリカ留学から帰国後, 金陵女子大学社会学部の教員になったが, まもなくして抗日戦争のために大学は成都に移った。中国には変節があり, 龍冠海も台湾に渡って, 台湾大学の教員になり, 後の半生の学者の生涯をおくった。かれと同時に台湾にやってきた何人かの社会学者は, 共同して中国社会学社を回復させたし, 台湾大学社会学部を創設した」(章英華, 1991, 龍冠海教授の生平與學術－東西文化洗礼下中国社会学家的一個例子 (龍冠海教授の生涯と学問－東西文化の洗礼化の中国社会学者の一事例), 『中国社会学刊』, 第 15 期, p.42)。さらにいえば, 韓明謨は中国社会学史の専門的な研究者として, 民国期の『社会学刊』(1929 年東南社会学会の創刊, 続いて 1930 年から中国社会学社から 1948 年まで発行) や学会についても記述している。当然, 龍冠海のことは知っていると考え無理はないと訳者は考える。

- (12) 馬康庄, 1995, 「我国社会学理論發展面臨的困難 (代訳序)」(わが国の社会学理論の直面する困難－訳書の序文に代えて－), ジョージ・リッツア著, 馬康庄・陳信木訳, 前掲書, p.9。
- (13) 陳序経, 1935, 「關於全般西化答吳景超先生」(全面的西洋化について吳景超先生に答える), 『独立評論』, 第 142 号。
- (14) 潘光旦, 1997, 「談中国的社会学」(中国の社会学を論ず), 『潘光旦文集』, 第 5 集, 北京大学出版社, pp.428-432。
- (15) 訳者註: 袁陽, 1988, 「中国社会学の危機——対近幾年中国社会学支点的反思」, 『学習と探索』, 総第 56 期, 黒龍江省社会科学院, pp.82-86。なお, 韓明謨の本書論述にはこの袁陽論文の執筆年, 雑誌の号数, 発行所, ページの記載がないので, 注 15 から注 18 までは訳者が袁陽の原文から補足した。
- (16) 訳者註: 袁陽, 同上, p.82。
- (17) 訳者註: 袁陽, 同上, pp.85-86。
- (18) 訳者註: 袁陽, 同上, p.86。
- (19) 費孝通, 1988, 「経歴・思解・反思——答客問 (経歴・思索・再考——質問に答えて)」, 『中央盟訊』, 7 月増刊。
- (20) 訳者註: 王継, 1997, 「21 世紀中国社会学の理論架構試探」, 『社会』, 第 7 期, 上海大学『社会』編輯部, pp.12-14。なお, 韓明謨はこの出典について, 『社会学研究』, 1997 年, 第 5 期と記しているが, これは明らかに誤記であるので原資料に照らして上記のように訂正した。
- (21) 訳者註: 韓明謨 (1987 著)・星明訳, 2005, 『中国社会学史』, 行路社。
- (22) 訳者註: 韓明謨, 2002, まえがき, 前掲書, p.2。

〔謝辞と付記〕

思い起こせば, 韓明謨先生著の『中国社会学史』(1987, 天津人民出版社)をはじめて手にしたのは 1989 年のことである。そして, その書の第 3 章「中国社会学の萌芽」を訳し終え, 1990 年に佛教大学の『社会学部論集』に掲載すべく韓先生に手紙で許可を求めたところ, 先生から「同意します。日本のみなさんにわたしの研究を紹介して下さって嬉しく思います」というお返事をいただいた。その後, 韓先生とは生前, 北京でなんとなくお会いした。うえの著書の日本語の翻訳書『中国社会学史』(2005, 行路社)⁽²¹⁾の出版も快諾いただき, 「日本語への序文」も書いてくださった。

韓明謨先生は 1944 年に西南聯合大学社会学部を卒業 (学士) し, 1949 年に清華大学研究

中国社会学の回顧と展望（韓 明 謨・星 明）

生院社会学研究所を修了（修士）し、行政、研究所などの実務の仕事を経て、北京大学社会学部教授に就かれた。大学では主に社会学理論、中国社会学史、農村社会学および中国社会発展問題の教育と研究に従事した。先生は、旧中国と新中国の二つの社会体制およびそれぞれの社会の社会学を体験された社会学者である。先生は『20世紀百年学卷・社会学卷』（2002）の「まえがき」を書いた2000年5月当時、第1世代と第2世代の社会学者はすでに指折り数えられる人数になってしまったと記しているが⁽²²⁾、2018年8月現在、韓先生を含め第3世代社会学者も鬼籍に入られた。先生は2014年11月18日午前7時、北京の海淀医院で逝去された。享年96歳。敬祈韓明謨先生冥福。

（ほし あきら 現代社会学科）

2018年10月24日受理